私の学び

子どもに「生きる自信」を

NPO法人グロービー理事長
丸亀　恭敬さん（54）

何かの拍子で学校に行けなくなったり、家に居場所がなかったり。悩みを抱えた子どもたちにボクシングを通じて「生きる自信」を育んでほしいとNPO法人をつくり、ことしで15年目になる。子どもたちが社会で強く生きる手助けになれば、と思う。

きっかけは自身の経験にある。今では信じられないような話だが、広島山陽高に入学直後からパンチパーマ。授業をサボるような生徒だった。

ある時、授業中に校門を出ようとした時、ボクシング部顧問の増岡和彦先生（2013年に67歳で死去）に見つかった。「何しよんかい」。こっぴどく叱られ、耳を引っ張られて連れ戻された。

それから連日、ボクシング部で猛練習をさせられた。叱られてばかり。反発すると「コンビネーションパンチいいね」と褒めてくれたりもする。自分を受け止めてくれているー。いつしかそう感じ、感謝するようになった。フライ級で全国高校総体に出て、東洋大でも選手として国体に出場した。

大学卒業とともに選手を引退し、広島へ戻ってきた。自分を育ててくれたボクシングを生かしながら、悩める子どもの力になりたい。そんな思いで1991年、NPOの前身に当たる「府中町ボクシングクラブ」を立ち上げた。

広島市安芸区に置くジムには毎日10人ぐらいの子どもが来る。最近は、自己肯定感が低く、ストレスの多い子が多い。だから縄跳びを10回跳べたら褒める。サンドバッグで一回でもいいパンチがあれば褒める。うつむき加減だった子が少しずつ顔を上げ、話せるようになる。

かつて不登校だった中学1年の男の子がいた。縄跳びやランニングを2年間コツコツとしていた。ある日、大学生とスパーリングをしたら、勝ってしまった。それがきっかけで学校にも行き始めた。

大切なのはちょっとしたきっかけと自信、とあらためて気付いた。そしてそれがいつつかめるか分からないから人生は難しい。

競技やテストがうまくいって褒められるのは当たり前。自分が光を当てたいのは、それができない子どもたち。人生を前向きに考えられる子を一人でも増やしたい。自分を変えてくれた、増岡先生のように。（聞き手は貞末恭之）

まるがめ・やすのり　1963年、広島市中区生まれ。広島山陽高でボクシングを始め、東洋大まで選手として活躍。卒業後に帰郷し、会社員生活を送る。2004年、グロービーを立ち上げた。広島県ボクシング連盟副理事長。広島県府中町在住。